

研究紀要

第21号

黒曜石製石器の产地推定とその様相について
—雅楽谷遺跡と周辺遺跡—

上野真由美 望月明彦

池上・小畠田遺跡の土壙について
—その配置と性格を中心にして—

宅間清公

旧入間用水系下流域の周溝墓と周溝（上）

福田 聖

坂塚古墳群の様相

山本 稔

古墳時代の河川交易
—下田町遺跡へ貝を運んだ道—

赤熊浩一

中世渡来銭にみられる所謂星形孔銭の検討
—北宋の貨幣政策と銭貨化学組成の変動—

清水慎也

中世～近世の地鎮について（下）
—墨書き土器を用いる例を中心として—

鈴木孝之

図書の分類と整理について
—文献データベースの作成—

新屋雅明 金井義直

蓮田周辺採集大珠の鉱物分析

大屋道則

北本市内出土石製品の鉱物分析

磯野治司 斎藤成元 清水慎也 大屋道則

埼玉県内河用砂の鉱物組成について
—胎土分析に関する基礎資料—

大屋道則 清水慎也 横山一己

石器材料及び石器の理化学的分析値（1）
—XRFによる黒曜岩分析値（2005年度）—

大屋道則 西井幸雄 上野真由美 亀田直美
国武貢克 島立桂 田村 隆 望月明彦

2006

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団





2 clinochlore talc



4 talc



3 clinochlore talc



20 talc



12 clinochlore muscovite



8 quartz muscovite



14 clinochlore



19 quartz celadonite



1 clinochlore



16 augite



13 omphacite



11 jadeite



17 tremolite



6 tremolite



10 jadeite



7 tremolite



18 tremolite



5 tremolite



15 tremolite



9 tremolite



目 次

序

- 黒曜石製石器の产地推定とその様相について 上野真由美 望月明彦 (1)
－雅楽谷遺跡と周辺遺跡－
- 池上・小敷田遺跡の土壤について 宅間清公 (35)
－その配置と性格を中心に－
- 旧入間川水系下流域の周溝墓と周溝（上） 福田 聖 (51)
- 飯塚古墳群の様相 山本 穎 (85)
- 古墳時代の河川交易 赤熊浩一 (91)
－下田町遺跡へ貝を運んだ道－
- 中世渡来銭にみられる所謂星形孔銭の検討 清水慎也 (109)
－北宋の貨幣政策と銭貨化学組成の変動－
- 中世～近世の地鎮について（下） 鈴木孝之 (145)
－墨書き土器を用いる例を中心として－
- 図書の分類と整理について 新屋雅明 金井義直 (171)
－文献データベースの作成－
- 蓮田周辺採集大珠の鉱物分析 大屋道則 (183)
- 北本市内出土石製品の鉱物分析 磯野治司 斎藤成元 (185)
清水慎也 大屋道則
- 埼玉県内河川砂の鉱物組成について 大屋道則 清水慎也 (191)
－胎土分析に関する基礎資料－ 横山一己
- 石器材料及び石器の理化学的分析値（1） (199)
－XRFによる黒曜岩分析値（2005年度）－
大屋道則 西井幸雄 上野真由美 亀田直美
国武貞克 島立 桂 田村 隆 望月明彦

飯塚古墳群の様相

山本 槟

要旨 飯塚古墳群の報告を事業団報告書「飯塚北II／飯塚古墳群II」第321集に掲載したが、紙幅の都合で飯塚古墳群のまとめを載せることができなかつたためここに掲載する。

飯塚古墳群は方墳と円墳より構成され21基が確認されている。方墳4基のほかに埴輪を伴う円墳、横穴式石室や土坑を内部構造とする円墳がみられる。初期群集墳と後期群集墳に大別することができ、その成立段階・変遷を探ろうとするものである。

はじめに

飯塚古墳群は、利根川右岸の利根川及び利根川の支流によって形成された自然堤防とその後背地からなる妻沼低地に位置し、熊谷市北部（旧妻沼町域）の芝川と福川の間の微高地上に立地する。

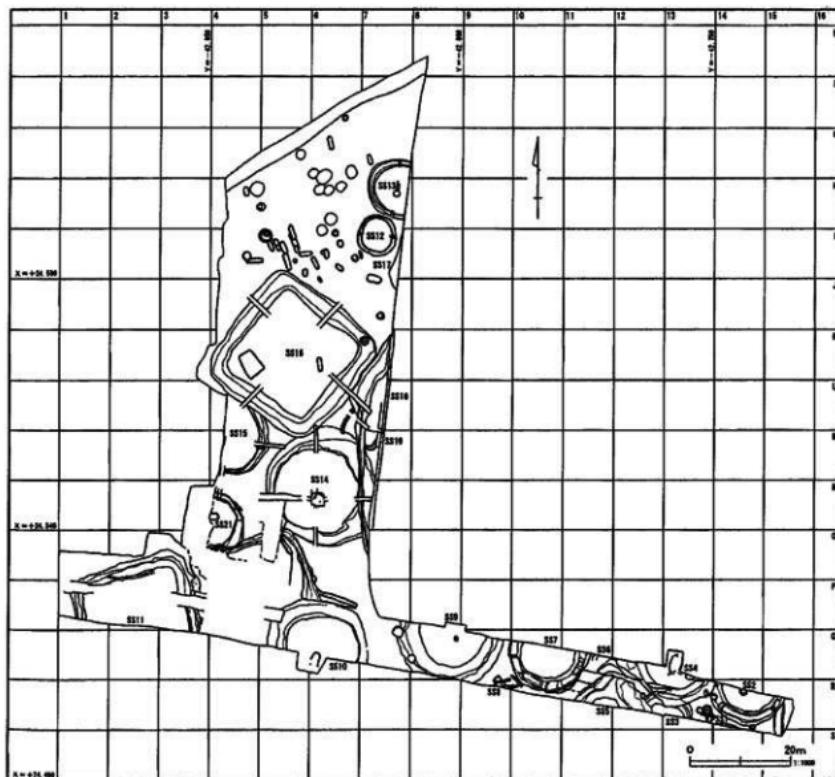
古墳群は円墳と方墳からなるもので、方墳は4基、円墳が13基、円墳とみられるもの4基の計21基が検出された。また、4基の円墳から角閃石安山岩削

石積みの横穴式石室が4基検出されている。なお、第20号墳は県道を挟んだ東側で調査されたものである。

古墳群の範囲は、西から北西は埋没谷によって飯塚北遺跡と画され、北東から南側は調査区域外となつており古墳の広がりは明確ではないが、調査された西部が古墳群の西限とみられる。

古墳一覧表

	墳形	墳丘規模(m)	周溝規模(m)	主体部	副葬品	出土遺物	埴輪
第1号墳	—	—	—				
第2号墳	円墳	10.8 × 11.0	15.3 × 15.6				
第3号墳	円墳	11.1	14.0				
第4号墳	円墳	11.9	17.4	横穴式石室	滑石製丸玉・刀子 須恵器平瓶・横瓶 鉄刀・刀装具		
第5号墳	円墳	9.0	15.6				破片
第6号墳	—	—	—			土師坏片	
第7号墳	円墳	10.7	16.0				円筒・朝顔
第8号墳	—	—	—				
第9号墳	円墳	13.0 ~ 13.4	20.4 ~ 20.8			土師坏・甕	円筒・朝顔
第10号墳	円墳	14.7	20.4	横穴式石室	ガラス小玉・耳環 鉄鏡・鐵刀		
第11号墳	方墳	19.2	23.7			土師器坏・須恵器提瓶	
第12号墳	円墳	6.0 ~ 6.4	7.6 ~ 8.2				
第13号墳	円墳	9.4 ~ 9.6	11.7 ~ 12.1				
第14号墳	円墳	16.0	21.7 ~ 24.1	横穴式石室		土師器坏・壇・甕	
第15号墳	円墳	14.6	15.2	横穴式石室		銅製釘	
第16号墳	方墳	25.5 × 26.0	26.5 × 27.3			土師器坏	円筒片・錦片
第17号墳	—	—	—				
第18号墳	方墳	—	—				円筒片
第19号墳	方墳	6.7	7.8				
第20号墳	円墳	16.0	20.0			土師器坏	円筒片
第21号墳	円墳	10.0	16.0	土坑		土師器坏	



第1図 飯塚古墳群全測図

1 墓丘規模

飯塚古墳群で確認された21基のうち、周溝の一部以外は調査区域外となっている方墳1基と円墳と推定される4基を除いた15基について墳丘規模等について検討を加える。

方墳の第16号墳は円墳も含めた中で墳丘規模は25.5~26.0mを測り古墳群中最大の規模を有する。方墳の第11号墳は円墳を含めても第16号墳に次ぐ墳丘規模は19.2m測る。第19号墳は6.7mと小規模

であり、方墳とみられる第18号墳にも壠されていることから、方形周溝墓の可能性がある。

円墳は、墳丘径16.0mの第14号墳と同規模の墳丘径16.0mの第20号墳が最大で、墳丘径6.0~6.4mの第12号墳が最小である。第14号墳・第20号墳に次いで、墳丘径14.7mの第10号墳、墳丘径14.6mの第15号墳がほぼ同規模で、第9号墳が墳丘径13.0~13.4mと続く。それ以下の墳丘規模は、径9.4

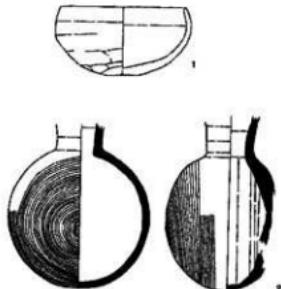
~11.9 mでややばらつきがある。

2 土器

古墳出土の土師器・須恵器は周溝出土のものが主体であり、周溝覆土の中位程度で出土しており、それらは築造以降に共獻されたとみられる。第21号墳では主体部の土坑から土師器坏が出土している。

第11号墳の周溝から出土した土師器坏は、体部が内湾する半球形で口縁部が僅かに内傾する坏で、一本木前遺跡のⅢ後期・前・居立遺跡の第Ⅲ期に該当している。更に新屋敷遺跡のIa期に属する第49号墳の坏は内外面ともに赤彩されているがタイプ的には類似するもので、共伴する須恵器からTK23~TK47型式の特徴を備えたものとして、5世紀後葉から末葉を中心とする時期に位置づけることが妥当であろう。また、墳丘掘出土の須恵器提瓶は把手がなく形態化し、根平1号窯址出土のものと類似している。根平1号窯址の共伴遺物の須恵器坏はTK209からTK217型式期であり、7世紀第Ⅱ四半期を中心とする時期に位置づけられ、周溝出土の土師器とは時期差があり、築造以降の共獻と考えられる。

他古墳から出土した土師器坏は、須恵器坏蓋を模倣したいわゆる模倣坏である。



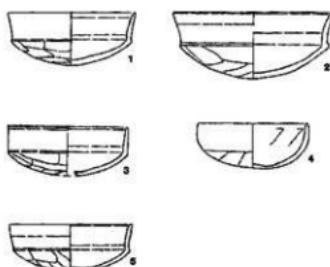
第2図 第11号墳出土遺物

第9号墳出土の土師器坏は墳丘寄りの南西周溝の覆土中位から3点(第3図3~5)が重なって出土し、築造以降に共獻された状態で出土している。土師器坏は丸味を持つ体部から段を成し、端部は丸く直立及び僅かに外傾する口縁部が作り出されている。また、その2点に挟まれて丸底から丸味を帯びて立ち上がる坏が共伴している。模倣坏は新屋敷遺跡のⅡ期からⅢ期にかけてのものに該当し、6世紀第Ⅱ四半期から中葉に比定できる。

第14号墳・第21号墳の模倣坏は、体部の丸味がやや扁平化し、口縁部は外傾する。第9号墳出土のものより口縁部長が縮小する。6世紀後葉から末に位置づけられる。第5号墳の坏は図示できなかったが同様の坏である。

第20号墳からは須恵器坏身を模倣した口縁部が内屈した土師器坏が出土している。上敷免遺跡第61号住居跡出土坏との類似性から、須恵器のMT85~TK43型式期、6世紀第Ⅲ四半期を中心とする時期に位置づけられ、埴輪とは若干の時期差がある(大谷2005)としている。

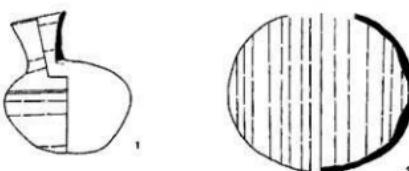
第7号墳と第9号墳の周溝から裏が出土している。第7号墳は東側周溝のやや深い位置で検出され、第9号墳は西側周溝の中位以上で検出された。



第3図 第9号墳出土遺物



第4図 第14号墳(1・2) 第21号墳(3) 第20号墳(4)出土遺物



第5図 第4号墳出土遺物

第7号墳の甕は底部から胴部中位以下であるが球脣形であり、第9号墳は口縁部から底部寄りまで出土しやや長胴化している。この甕からは、第7号墳の方が古く第9号墳が新しい傾向がある。

第4号墳周溝から須恵器平瓶と横瓶が出土している。桜山古墳群では平瓶が第8号墳・第10号墳・第12号墳から出土しており、桜山8号墳の平瓶は2点とも若干肩が張り、弱い丸底である。桜山第12号墳の平瓶はやや扁平気味で平底である。8号墳と12号墳の平瓶の中間形態であることから7世紀前半と捉えることができる。また横瓶としたものはフラスコ型長頸とみられ、桜山1号墳・8号墳のフラスコ型長頸瓶の胴部形態と同様の物であることから同時期の7世紀半前と捉えておく。

3 墓輪

飯塚古墳群出土の円筒埴輪は、第7号墳と第9号墳で大量に検出された。第7号墳では周溝覆土中位から、墳丘裾部から周溝内に転倒落したような出土状況を示していた。また、南東の墳丘裾部では埴輪の原位置で転倒した状況で検出されている。第9号墳では南側周溝に集中していたが、やはり周溝覆

土中位から出土していた。

それぞれ朝顔形埴輪を1点づつ有し、第7号墳では南西側周溝内から、第9号墳では南東側墳丘裾部に転倒した状態で出土している。

円筒埴輪は2条突帯3段構成の埴輪で、突帯は断面三角形のものが主体となっている。透かし孔は第2段に円形を主体とした透かし孔が設けられている。第7号墳出土の円筒埴輪は、器高が28.8cm～35.7cmを測るが、1点のみ30cm以下で、これを除けば31.1cm以上のものとなる。第1段の器高に対する比は、器高28.8cmの埴輪は28.1%で、他は31.5%～42.4%であるが、31.5%～34.3%と37.5%～42.4%の2グループに分かれる。山崎編年によると、Ⅰ期とⅡ期の範疇に入るものでありⅡ期の形態をもつものが6割程度を占める。

第9号墳の円筒埴輪は、第1段の器高に対する比は26.1%～45.2%で、第7号墳と同様の傾向が見られる。比が26.1%のもの以外は30.7%～45.2%で平均的に分布する。比が26.1%のものは胎土に黒色粒子を多量に含み他の埴輪の胎土とはまったく異なる。更に他の埴輪は口径から底部へとそぼまるのに対し、比較的寸胴形で底径口径比が74.3%、他は50～60

%が中心であることからも分かる。または破片で同じ胎土で突帯断面がM字形であることから同一固体とみられるものがある。山崎編年によるとⅠ期とⅡ期の範疇にはいるが、Ⅱ期の形態をもつものが6割程度を占め、Ⅲ期の形態をもつものも僅かにある。

第20号墳の円筒埴輪は山崎編年の概ねⅡ期に比定でき、6世紀前葉から中葉の年代が与えられている。

グリッド出土ではあるが、人物埴輪の男性の頭部、動物埴輪（馬）の脚部が第14号墳と第16号墳の重複部分の東方から出土し、人物の足部とみられる破片が第14号墳の南東部から検出されている。他からも馬形埴輪の鉗、人物または他の形象埴輪の基台部とみられる埴輪も出土している。

4 重複関係

第2号墳は第4号墳と重複し、第4号墳に周溝の一部が壊されている。

第4号墳は第2・3・5・6号墳と重複し、第2号墳の西側周溝・第3号墳の北側周溝・第5号墳の北東側周溝・第6号墳の上部を壊していることより、いずれの古墳よりも新しい。また、第4号墳は角閃石安山岩削り石の胸張り横穴式石室をもつ。

その他には、第14号墳と第16号墳・第18号墳との関係については切りあい関係が不明である。方墳の第18号墳西辺と第16号墳の東辺が接しており土層断面より第18号墳が第16号墳の周溝を壊して築造されている。

小型方墳の第19号墳は代14号墳に壊されている。

単独で他古墳と重複していないものは、円筒埴輪を多量に出土した第7号墳・第9号墳、遺存状態が比較的良い横穴式石室をもつ第10号墳、方墳の第11号墳、円墳の第12号墳・第13号墳・第20号墳・21号墳がある。

5 横石室穴式

石室は4基の円墳で検出された。いずれも角閃石安山岩の削り石積みである。第10号墳は遺存状態が最もよく、第4号墳は西側壁と玄室床面、第14号墳・第15号墳は根石のみの確認であった。玄室プランは根石などの遺存状況から第10号墳の奥壁は湾曲しているが側壁は直線的である。他の3基は側壁及び根石は湾曲しており胴張型石室である。

第10号墳の構造は、角閃石安山岩を用い根石としてプランを設定し2段目には側壁と玄室内にも安山岩を敷き詰め、その上に玉石状の川原石を敷き詰め玄室床面としている。奥壁・側壁の石積みは石の上面を削り積み上げる方法である。側壁内面の削りはほとんど施されていないが、数点内面が削られているものもある。胴張型石室の第4号墳をみると構築法は第10号墳と同じであることから他の2基についても同じ構造とみられる。

まとめ

飯塚古墳群の古墳の築造は、第11号墳周溝出土の土師器壺から第11号墳を嚆矢とする。第11号墳は4基ある方墳の内2番目の規模で古墳群の西端に位置し、他の古墳とも重複しておらず、他遺構からの遺物の混入も無いことから妥当であろう。

最大の方墳であり、古墳群の中でも最大の第16号墳は、東側の第18号墳に周溝が切られており第18号墳より古いことは明らかである。また、第16号墳の墳丘下の遺構から五領期の台付甕が出土していることからそれ以降であることしか判別できないが、第11号墳とさほど時期差は無いと考えられる。

第9号墳は周溝出土遺物から6世紀第II四半期から中葉とされ、埴輪においては第7号墳とはほぼ同時期である。第7号墳と第9号墳は周溝外周の間が1.2mと非常に近接しているが、両墳は埴輪をもつ

円墳としてほぼ同時期に相次いで構築されたものであろう。円筒埴輪から見て第7号墳が先行し、次いで第9号墳が築造されたものと考える。しかし、第9号墳の円筒埴輪の遺存状態は多くの円筒埴輪が南側周溝に集中して廃棄されたような状況で出土していることからは第9号墳が第7号に先行するとも考えられる。

第14号墳墳丘出土の土師器坏と第21号墳主体部出土の土師器坏は同時期のものである。出土位置からみて第14号墳が第21号墳より古くなる。

第4号墳は周溝出土遺物から7世紀後半以前と捉えることができ第2号墳・第3号墳・第5号墳・第6号墳の中型円墳が廃絶後に横穴式石室をもつ円墳が築造された。

横穴式石室をもつ4基の円墳はいずれも埴輪を伴

わない。

第10号墳の玄室は奥壁が湾曲しているが、側壁はほぼ直線的である。第4号墳・第14号墳・第15号墳の3基は胴張型石室で第14号墳の胴張りが大きい。なお、第10号墳はガラス小玉が大量に副葬されており、ガラス小玉を含め同様の副葬品を有する古墳は小前田古墳群の第3号墳・第18号墳に見ることができる。第18号墳は胴張型石室で埴輪を有しないことから7世紀前半と捉えられている。石室をもつ古墳は第10号墳が最も古く、第4号墳と第14号墳への変遷が考えられる。第15号墳は墳丘規模が小さいことから第14号墳に後続するものと考えられる。

飯塚古墳群は、方墳が築造され、次に埴輪を樹立する円墳が構築され、やがて横穴式石室を内部構造とする古墳が構築される。

飯塚古墳群に関する挿図・表などは参考・引用文献(山本 2006)を参照されたい。

参考・引用文献

- 岩瀬 謙 1995 「前・居立」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第151集
鈴持和夫 1993 「ウツギ内・砂田・柳町」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第176集
大谷 徹 1996 「新屋敷遺跡C区」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第175集
大谷 徹 1998 「新屋敷遺跡D区」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第194集
大谷 徹 2005 「飯塚古墳群I」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第317集
小久保徹ほか「桜山古墳群」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第2集
寺社下博 2004 「一本木前遺跡V」 熊谷市教育委員会
浅瀬芳之 1986 「小前田古墳群」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第58集
酒井芳之・山本靖 1993 「上歎免遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第128集
山崎 武 2000 「埼玉県の円筒埴輪の編年について」 「埴輪研究会誌」第4号 墓輪研究会
山本 順 2006 「飯塚北II／飯塚古墳群II」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第321集

研究紀要 第21号

2006

平成18年6月20日 印 刷

平成18年6月27日 発 行

発 行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4-4-1

電 話 0493-39-3955

<http://www.saimabun.or.jp>

印 刷 誠美堂印刷株式会社